

# 生活指導における言語と行為

## とに関する研究

お茶の水女子大学 松村康平  
西南女学院短期大学 桐井玲子

**研究目的** 本研究は幼年期における子どもの発達段階に即した言語と行為との関連づけによる生活指導の一方法に關しての基礎的研究であり、具体的事物の動きに即応して展開される言語活動と言語活動に即して展開される具体的事物の動きとの關係に關する一研究である。本研究の目的は、他人からの働きかけにおける言語をどのように行為化することができるか、また、事物の動きに即してどのように言語活動を展開することができるかを解明することにある。

**研究方法** (1)実験材料 家族人形として高さの異なる白色円錐型4個。(最小、高さ4cm。最大、高さ7cm。)この抽象的な人形を、父、母、兄、妹と任意に選択命名することによって具体性をもたせ、これによる人形あそびを展開させる。

(2)実験方法 a、行為↓言語化の実験、b、言語↓行為化の実験、c、aとbを併用した実験。

(3)被験者 幼稚園児男女各20名、小学生(2年生)男女各20名、計80名。

**結果の考察** 幼児においては、具体的事物の動きに即して概念的な考察を正確にするというよりも、具体的な動きの中で思考し、こ

るといえよう。あたえられた言語を理解して行動にうつすことは、小学生の方が速い。 $[F(2) = 15.54, df = 1, P(0.05) = 6.64]$ 。しかし、行為の言語化は幼児の方が速い。 $[F(2) = 28.2, df = 1, P(0.05) = 6.64]$ 。幼児では、聞くこととおこなうことが関連づけられず、聞く時はきいてしまひ、それから行為を始めるので遅くなるものと思われる。小学生については、具体的事物の動きそのものから言語的意味を把握するよりも、具体的事物の動きを一度自分のものとして概念的の世界に位置づけてから、言語表現をするという概念的思考の特徴が考えられる。また、幼児・小学生ともに、生活領域の大部分は、日常生活であり、特にあそびに關するものである。幼児期においては、行動を伴った生活指導の大切であることを、研究結果は示している。

## 幼児の生活環境と

### 読書レディネス

大阪商業大学付属幼稚園 土山 汀

**目的** 幼児の読書力の程度はいろいろとみられるが、幼児が入学までにどれほどの字を読むか、また、生活環境によって、いくらかの差がみられるか、家庭では幼児期の読書力についてどのように考えているかなどについて、それらの実態を知りたいと思ひ調査をおこなった。

**調査対象と期間** 1、新入学一年生 一四三四名 2、入学前の園児 七一四名 3、新入園児 一四五八名  
昭和三十三年二月より三十四年四月まで

**調査方法** 1、質問紙法 2、テスト調査